別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　谷利　美希

論　文　題　目

脳血管疾患による注意機能障害に対する作業療法構築のための臨床研究

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　　辛島　千恵子

名古屋大学教授　　千島　亮

名古屋大学教授　　寳珠山　稔

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

【背景と目的】脳血管疾患患者の作業療法対象者の中で，注意機能障害を呈する患者の頻度は高く，その諸症状は生活への適応を困難にする．注意機能改善への効果的な介入を行うには，対象者の注意機能障害の特徴や日常生活への影響、変化を介入経過の中で把握することが必須である．本研究は，活動場面で注意機能障害の程度に合わせた作業療法を構築するための情報を得ることを目的に，脳卒中回復期と慢性期において注意機能障害がいかに変化するかを観察し活動場面において注意機能の変化を促すことが可能か検討した．

【目的】注意機能を縦断的に評価する課題を作成し，回復期および慢性期脳血管疾患患者の注意機能障害の改善予測の指標としての有用性を検証した．課題の達成度と従来の神経心理学的検査や日常生活活動との関係を明らかにした．

【方法】注意機能に問題がある脳血管疾患回復期患者 14 名，慢性期患者 10 名を対象とし，注意機能を捉える 13 段階の課題（段階的作業課題）を作成した．段階的作業課題の結果と従来の評価方法 Functional Independence Measure (FIM)，Ponsford’s Attentional Rating Scale，Mini Mental State Examination，Trail Making Test Part A，Part B，浜松式かなひろいテスト物語文，Paced Auditory Serial Addition Test の成績との関連性について Spearman’s test を行った．

【結果】課題のエラー率は回復期，慢性期ともに改善と後退を繰り返し，徐々に改善した．回復期患者については初期の段階的作業課題成績と最終的に到達した従来の評価点数の間に有意な相関が認められた．慢性期患者ではその相関はわずかであった．

【主な知見】段階的作業課題は，従来の１時点での評価法とは異なり，注意機能の変化を縦断的に観察できることで，予後予測のために有効であることが示された．また慢性期患者の注意機能においても段階付けによる反復練習の効果は認められ注意機能回復の可能性は残るものと示唆された．

【新知見と意義】本研究の新知見は，注意機能に関して介入となりつつ回復予測的情報を提供する段階的作業課題の有用性が示されたことにある．機能障害などのいわゆる高次脳機能についてその障害の程度と回復予測の情報を介入と同時に定量的に得る視点は，これまでのリハビリテーションには少なく，機能回復に新しい視点を取り入れた研究としても意義があると評価された．

本論文の一部は英文国際誌 International Journal of Therapy and Rehabilitation（IF=0.45, 2017）に掲載された．以上より，本研究は博士（リハビリテーション療法学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した．

38 字×35 行

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第　　号	氏　名	谷利 美希
試験担当者	主査　名古屋大学教授　辛島 千恵子 印　名古屋大学教授　千島 亮 印　名古屋大学教授　寳珠山 稔 印		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し，次の問題について試験を実施した．

1.注意機能障害の定義について

2.改善の予測指標として有用性が示唆された段階的作業課題で捉えられる慢性期患者の注意機能障害の変化について

3.注意機能障害の改善過程を段階的作業課題で推察できることの意義について

4.脳血管疾患の慢性期患者の段階的作業課題と生活場面での介入の段階づけについて

5.本研究の限界と発展について

以上の試験の結果，本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに，リハビリテーション療法学一般における知識も十分具備していることを認め，学位審査委員合議の上，合格と判断した．